

持続的なコミュニティ開発へのソーシャル・キャピタルの役割

—ネパールの女性グループによるマイクロファイナンス活動の事例から—

青木 千賀子

Chikako AOKI. Community Development and Social Capital : Case Studies of Women's Groups in Nepal. *Studies in International Relations* Vol.37, No.1. October 2016. pp.15 – 26.

The recognition and creation of social capital is getting more important in community development. Focussing on the Badi communities in Nepal, the paper examines the effectiveness of social capital with specific reference to the microfinance program.

Badi community, the lowest group of the caste system, is considered as the most disadvantaged group of the Nepalese society by the Hindu norms and values. The Badi women are stigmatized and disgraced by state, society and community for practicing commercial sex work as a caste occupation. In such circumstances, the Badi women have started activities of microfinance.

The paper, which is based on the field surveys conducted by group/individual interviews in Nepal in 2015, concludes that microfinance program has created a social capital which has empowering effects such as their participation in community work, capacity building, and decision making on women's group. On the other hand, special attention has to be paid to "dark sides" of social capital such as "bonding social capital" which sometimes is shown to be negative for innovation.

The empirical findings suggest that building social capital through microfinance will promote community development.

はじめに

貧富格差が拡大する中、経済開発中心から社会開発や人間開発¹⁾などが注目されるようになり、開発援助の分野においてもソーシャル・キャピタル（Social capital：社会関係資本、以下SC）の概念が、1990年代後半から脚光を浴びるようになってきた。

その大きな契機となったのは、アメリカの政治学者ロバート・パットナム（Robert D. Putnam）の二つの著作 *Making Democracy Work*（邦題：『哲学する民主主義』）と *Bowling Alone*（邦題：『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』）である。

パットナムはSCを「人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、『信頼』『互酬性の規範』『ネットワーク（絆）』といった社会組織の特徴」と定義した（パッ

トナム 2001：206-207）。また、「SCが指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である。この点において、SCは『市民的美德』と呼ばれてきたものと密接に関係している」と述べている（パットナム 2006：14）。このSCの研究や議論を援助の持続可能性に関係づけ、推進してきたのは世界銀行であり、開発経済学の実践的議論を展開してきた（佐藤 寛 2001：4；三隅 2015：134）。

日本では、内閣府による報告書『平成14年度ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』を皮切りに、地域やコミュニティの機能の低下に対して、SCの視点から再生・活性化を図る研究が行われてきた（内閣府経済社会総合研究所編 2005）。

筆者は、これまでにネパールの女性グループによるマイクロファイナンス（Microfinance：小口

金融、以下MF)の活動とSCの関係について、フィールドワークによる聞き取り調査を行い、社会開発におけるその有効性を検証してきた(青木2015;2016:7-18)。

本稿では、これらの知見を基盤に2015年4月に発生したネパール大地震の被災後の聞き取り調査を基に、持続的なコミュニティ開発に向けてSCの醸成が、MFの活動を通して貧困緩和や女性の地位向上につながるのか、ディーセントワーク(働きがいのある人間らしい仕事、厚生労働省)を推進する力になるのか、実証的な事例分析により明らかにすることを目的とする。

1. 研究方法と本研究の論点

1.1 フィールドワーク：調査対象者，調査地区，調査期間，調査方法，調査内容

持続的なコミュニティ開発へのSCの役割を考察するために、ネパールの女性グループのMFの活動の聞き取り調査を基軸にフィールドワークを実施した。調査の概要は、以下のとおりである。

調査対象者は、バディ(Badi)カーストのコミュニティにおける女性グループのメンバーである。バディは、「ダリット²⁾(Dalit:抑圧された者の意)」と呼ばれるカースト制度³⁾の最底辺に置かれた被差別集団に属し、その中でも最下層に位置づけられたカーストである(Kisan 2008:10)。ダリットは「職業カースト」と呼ばれるように、伝統的な職業(ペサ:pesha)をもつ職業集団で、社会の底辺の労働を担っているが、バディは生まれながらに売春を職業として宿命づけられているカーストである。

バディコミュニティはネパールの極西部・中西部地区に集中しており、その実態調査の結果についてはすでに報告した(青木2010:33-47)。

ネパール政府は2010年9月10日にすべてのバディコミュニティに対して、「売春の職業を禁ずる」という通達を行った。バディコミュニティの多くは、この発令以前に性労働廃止の方向で生計を営んでいる。

本研究の調査地は、政府からの上記通達以降も売春を職業として継続している極西部地区のカイ

ラリ(Kailali)郡ムラ(Mudha)と、中西部地区のバルディア(Bardiya)郡ラジャプール(Rajapur)の2つのバディコミュニティである。両コミュニティでは、政府の売春取り締まりが厳しくなり、これまでのようにコミュニティ内でペサ(売春の職業)ができなくなったため、近隣地域やインドでペサを続けている。

調査期間は、2015年12月22~28日である。

調査方法は、女性グループ全体と個々の女性に対する個別聞き取り調査を実施した。調査は、現地NGOのSAFE(Social Awareness for Education)の協力を得て行われた。

調査内容は、SCの協同行動を基盤にしたMFの活動によるコミュニティ開発の実態と変容、持続性に関する課題の把握である。具体的には、MF活動と生活向上への成果、グループ内の融資に対する返済状況、組織運営、また、家族構成や収入・支出の現状、教育状況、コミュニティ内のSCなどである。

1.2 MFとSCの概念とコミュニティの開発

1.2.1 MFの概念と活動

MFとは、貧困層や低所得層を対象に貧困緩和を目的として行われる小口金融(あるいは小規模金融)のことである(岡本他1999:5-10)。MFは、既存の金融機関やあるいはMF専門機関等を通して行われるものなどがあるが、実際には銀行、協同組合銀行、NGO、グループ内でのお金の管理等でさまざまに運用されている。また、MF活動は借りた資金を自分や家族の力で返済していくことが基盤になっており、「施し」による依存関係から脱出し、対等な人間関係を構築し、自尊心につながる活動(川村2012:263)として期待されている。

ネパールでは、女性グループを中心にMF活動が地域に応じてさまざまなかたちで展開されている。MF活動は、グループ内での貯蓄・貸出活動を通して、養鶏、養豚などの家畜の飼育や野菜の栽培、店の開設等による所得創出や不測の事態(災害、家族の事故や病気)時の費用、生活費(食費、教育費、冠婚葬祭の費用、出稼ぎの支度金)など、生活不安を軽減する目的で活用されている(青木2015)。

1.2.2 SCの概念と類型

このようなMF活動を効率的、持続的に推進していくためには、協調行動の基本となるSCがコミュニティ活動の鍵となる（青木 2015）。

SCには、その性格、特質からいくつかのタイプがあり、最も基本的な分類として、内向きで同質なもの同士が結びつく「結束（結合）型（bonding）SC」と、外向きで異質なもの同士を結びつける「橋渡し型（bridging）SC」というものがある（内閣府国民生活局編 2003：17-18；稲葉 2011：31・165；坪郷 2015：4；パットナム 2006：19-20）。NPOなどのネットワークは、「橋渡し型のSC」である。それらに加えて、3つ目のタイプとして、「連結型（linking）のSC」という見方もある。これは、権力、社会的地位や富に対するアクセスが異なる社会階層の個人や団体をつなぐ関係である。例えば、コミュニティの範囲を越えて、公的機関から資源や情報を活用する能力であるとされる（内閣府国民生活局編 2003：19）。

1.2.3 コミュニティの開発

コミュニティ（Community）という概念は、アメリカの社会学者マッキーバー（R. M. MacIver）が定式化した社会類型の一つであり、共同生活を営む社会集団である。「共同体」（風見 2009：13）として、地域の歴史や文化を共有し、社会的類似性や共通の社会的思考や慣習、帰属感情などの社会的特徴⁴⁾をもつ。すなわち、「地域性と共同性という二つの要件を中心に構成されている社会」である（角 2008）。

細内（2010：45-46）は、「コミュニティでの活動（ビジネス）は、単に経済効果だけでなく、①人間性の回復（働き手の生きがいや自己実現づくり）、②地域コミュニティ内の社会問題の解決、③地域と住民の新たな経済的基盤の確立と雇用の創出、④生活文化の継承・創造、といった効果が期待される」と述べている。

1.3 本研究の論点

コミュニティの持続可能な開発の一環として、MF活動をSCの協調行動との関連から事例分析を行う。

本研究では、バディコミュニティの女性グループによるMF活動が、協調行動を基盤にしたSCの

醸成からディーセントワークを確立できるかどうか、所得向上や生活面で生ずる不安定さの軽減をはかり、差別構造の解消に向けて、新たな生活文化の構築を創造できるかどうか、これまでの調査結果に引き続き、その活動過程や持続性の課題を明らかにする。

2. バディコミュニティにおけるMF活動とSCに関する聞き取り調査

バディコミュニティの多くは、前述のとおり、すでにカースト制度によるペサ（バディカーストの職業は売春）を廃止し、日雇労働などに転職しているが、本研究の調査地であるムラとラジャプールは、その移行過程にある（青木 2016：7-18）。

両コミュニティとも20～30歳前後の女性たちが家計を支えるため、現在もコミュニティの近隣地域やインドで売春の職業を続けている。

2.1 2009年～2014年の聞き取り調査の要約

2.1.1 ムラの聞き取り調査結果

ムラは、幹線道路沿いに55軒の家が建ち並ぶバディコミュニティである。売春禁止令の発令後、「売春禁止」の看板がコミュニティ前に建てられ、コミュニティ内での売春取り締まりが、政府により厳しく行われている。住民は、「晒し者にされているようで屈辱的な思い」と憤りをあらわにする。代替の職業もサポートされないまま、「農地が穢れ、腐る」という理由で、高位カーストの土地で働くことも許されず、男性はインドへ出稼ぎに行き、女性は十分な教育も受けられず、コミュニティ内で助け合いながら日雇労働で生計をつないでいる。

こうした状況から、筆者との話し合い（グループに原資の貸与／支給を含む）で、2012年よりMF活動を開始した。最初は養鶏プロジェクト、2013年より養豚プロジェクトも開始した。MF活動を推進するためには、家畜の病気の予防・治療、飼料の与え方などの研修が必要になってくるが、こうした研修を受けるためには、郡行政事務所（DAO）にグループメンバー（最低25人必要）と規約書を提出し登録することが必須条件となっている。目下、申請中である。

2.1.2 ラジャプールの聞き取り調査結果

ラジャプールは、70軒のバディコミュニティである。ここは町に隣接しており、市場があるので雑貨店を開くなど所得向上のためのMF活動が2009年から行われている。

ラジャプールのMF活動の特徴は、バディ以外のさまざまなカーストや民族の階層（青木 2015：151）を超え、さらにジェンダーに基づく男女の差別問題を超え、活動を活性化していることである。

ムラとラジャプールの共通点は、コミュニティ内の信頼関係に基づく「結束型SC」が非常に強いということである（青木 2016：12）。

2.2 2015年12月の聞き取り調査

女性グループ全体と個人からの聞き取り調査を行った。調査内容は、(1) 女性グループ全体に対しては①MF活動のコミュニティ全体への浸透と生活向上への成果、②グループ内の結束と融資に対する返済、③持続可能な自発的参加型の組織運営などを、(2) 個人（ムラとラジャプール各5人ずつ）に対しては、①家族構成、②職業（収入源）、③支出、MF活動歴、④教育、⑤コミュニティ内のSCなどである。

2.2.1 ムラの聞き取り調査結果

(1) 女性グループ全体からの聞き取り調査

女性グループの代表、副代表、会計をはじめグループメンバー数名に集合してもらい、コミュニティ内で聞き取り調査を行った（写真1参照）。

2015年8月にグループの登録のため、3人（代表、副代表、会計係）が、片道3時間かかるダンガディの女性開発局に3～4日通い、登録を完了した。その後、政府による「女性グループの活性化、男女間・カースト間の差別禁止、チャウバディシステム⁵⁾（伊藤 2010：105-126）の禁止」などのジェンダーに関する研修を他のダリットグループと一緒に25名で受けた。また、カイラリ郡の家畜担当者から、豚の飼料の与え方などについても指導を受けることができた。しかし、規約書が未提出のため、グループ登録の証明書が、まだ発行されていないとのことであった。

2015年4月の大地震後、政府担当者がコミュニティに来て家屋調査をし、リストを作成した。そ



写真1 ムラの女性グループ

の後、土と竹で建てられている家屋（35軒）に対し、政府は再建築費用として、1軒当たり1万5,000ルピー（ネパール通貨：Rs, 1ルピー＝約0.86円：2014／2015年度平均値、ネパール中央銀行）を支給した。

①MF活動のコミュニティ全体への浸透と生活向上への成果：コミュニティ内には70世帯が居住しており、現在26人がグループメンバーである。毎月50Rsを集金し、返済利率は2%である。家畜の飼育や野菜栽培、食堂開設のための資金や、教育費、出稼ぎの費用などグループ資金から借りて、生活向上に役立てている。

②グループ内の結束と融資に対する返済：グループ内の結束は強く、女性グループのメンバー外の人もお金を借りることができる。これまでに返済で問題が起きていないが、額面上のグループ資金（10万～15万Rs）に対して、運用資金（5,000Rs）が極端に少なく、返済期限遵守の徹底や、貸出・返済のルールの見直しが必要となっている。

③持続可能な自発的参加型の組織運営など：グループメンバーは、コミュニティ内のネットワークのSCがよく、各自が自発的に参加し、協調行動をとりながら活動している。一方、月々50Rsを支払えず、グループに参加できない住民の課題が残っている。また、相変わらず周辺の高カーストの家に入れてもらえず、差別されており、交流がない。

(2) 個人からの聞き取り調査

女性5人のインフォーマント（informant：情報提供者、A～E）から、聞き取り調査を行ったが、

その結果を表1に示す。

①家族構成：6～11人で、2～3世帯家族が多い。売春で生まれてきた子どものうち、父親を特定できない場合や居所が不明な場合に、子どもの出生届を出せず、そのため市民権を得られず、学校に入学できないという問題が生じていた。しかし、現在母親の名前で出生届や学校入学許可、市民権を得ることが可能となった。もっとも現実には役所でセクハラにあたりして取得が困難な場合が多い（Bhadel 2008：85-98）。

売春をしている女性は、結婚しないが、子どもは老後のために産むという。お客と懇意になり、結婚した場合、その時点で売春の仕事をやめている。

②職業（収入源）：表1のB以外の女性は、カーストの職業である売春の経験がある。ムラでは現在12人が近隣で、15人がインドで売春をして生計を営んでいる。1ヵ月の収入は、被調査者の家庭では約15,000～20,000Rsである。女性は石やレンガ運びなどの日雇労働（300Rs/日）で賃金を得ている。一方、男性のほとんど（E以外の家族）がインドへ出稼ぎに行き、警備員、コック、日雇のレンガ運び等の仕事をして、約8,000Rs/月⁶⁾の収入を得ている。表中の数字は、全てネパールルピーに換算したものである（1インド・ルピー＝1.6ネパール・ルピー）。現在のMF活動からの収入だけでは、生計を営むには足りず、所得向上への開拓が必要である。

③支出、MFの活動歴：1ヵ月の支出は、約8,000～30,000Rsである。生活費が不足した時は、グループ資金から借りる。MFのグループメンバーでなくても借りることができ、コミュニティ内で排除されたり不利益を被ることはない。

MFの活動歴は、ほとんどが1～2年である。

④教育：ネパールの現在の教育制度⁷⁾は、2009年から実施されている学校改革プログラム（School Sector Reform Program）により、1～8年生（基礎教育）、9～12年生（中等教育）、大学（高等教育、学士コース以上）となっている。現行制度では、8年生まで無料、9、10年生は女子及びダリットのみ無料となっており、教科書は10年生まで無償支給されている。10年生及び12年生終了時に、各々全国共通の認定試験SLC（School Leaving

Certificate）がある。この成績は大学への入学、公務員の採用試験の際に必要とされる。

本調査のインフォーマントは、未就学～5年生まで就学という低い教育状況であったが、兄弟、姉妹、子どもたちは、中等教育まで学校教育を受けるようになってきている。

⑤コミュニティ内のSCなど：コミュニティ内の信頼関係が強く、各家の家族状況や家計についても熟知している。助け合いや協調行動が強く、信頼やネットワーク（絆）の内向きで同質なもの同士が結びつく「結束型SC」が極めて強い。お祭りには全員で参加している。しかし、他のカーストから差別されており、外向きで異質なもの同士を結びつける「橋渡し型のSC」や異なる階層をつなぐ「連結型のSC」が低い。

2.2.2 ラジャプールの聞き取り調査結果

(1) 女性グループ全体からの聞き取り調査

女性グループの代表（これまでのリーダーが病気のため、男性が代表を務めている）をはじめグループメンバー数名に集合してもらい、コミュニティ内で聞き取り調査を行った（写真2参照）。

川に囲まれたこのコミュニティ周辺に2015年に二つの新しい橋が建設され、往来が迅速かつ便利になった。そのため、皮肉にも減少しつつあった売春の仕事が増加し、30歳までの若い女性がベサとして売春の職業を再開している。NGOが、幼児婚防止の啓蒙活動を実施した。

政府は、各家に子豚を1匹ずつ配給し、子豚を飼育して増やした後、そのうちの1匹を返却するようにMF活動を奨励している。

①MF活動のコミュニティ全体への浸透と生活向上への成果：現在42人がグループメンバーである。毎月300Rsを集金し、借りたお金の返済利率は2%である。これまで、野菜栽培やヤギ、豚、鶏等の飼育、ろうそく作りやベサール（ウコン）という香辛料作り、雑貨屋等の店舗の開設などの所得の向上を目指す活動を活発に行ってきた。しかし、震災後、家畜の飼料代や、ろうそくの原料費の高騰などで、利益が上がらず所得向上に向けた活動は、停滞気味になっている。

②グループ内の結束と融資に対する返済：MF活動を始めて6年になり、コミュニティ内の信頼



写真2 ラジャプールの女性グループ

や規範、ネットワーク（絆）もますます強くなっている。借りたお金の返済は問題なく行われており、お金を貸す順番もミーティングの時に相談して決めている。グループ資金が17.5万Rsになった。

ところが、メンバーの一人が、インドでろうそくの材料を安く仕入れてくると約束して、6万Rsを借りたまま、戻ってこなくなった。MF活動には大きな痛手となり、停滞化の原因の一つになっている。不測の事態に脆弱であることが露呈した事例である。

SCについては、コミュニティ内では親戚が多い上に、「高位カーストから低くみられ、貧困である」という共通認識が強く、「結束型SC」が強い。毎月の集金額を払えず、MF活動に参加できないコミュニティの人も、病気の際はグループ資金からお金を借りることができる。

③持続可能な自発的参加型の組織運営など：これまでリーダーをし、メンバーを牽引してきた人が、病気になり、代わって男性がリーダーを務めているが、組織運営がうまくいっていない。アイデアを出し合って自発的に所得向上をはかる活動も停滞している。

(2) 個人からの聞き取り調査

女性5人のインフォーマント（F～J）から聞き取り調査を行ったが、その結果を表2に示す。

①家族構成：4～7人で、兄弟・姉妹や子供と暮らしている家族が多い。

②職業（収入源）：表2のIとJ以外の女性は、売春の仕事の経験があるが、現在は日雇労働（レン

ガや石運び）をし、1日300Rsの賃金を得ている。1ヵ月の収入は、被調査者の家庭では7,000～30,000Rsである。Hは、「売春の仕事をしなくてもよくなったことはうれしいが、金銭的に約15,000Rs／月の収入から、日雇労働の約3,500Rs／月への収入減は、生活が厳しくて悲しい」という。男性は、インドへの出稼ぎ者が多く、ムラの男性と同じく、警備員、コック、日雇のレンガ運び等の仕事をして、約8,000Rs／月の収入を得ている。

③支出、MFの活動歴：1ヵ月の支出は、約6,000～20,000Rsである。生活費が不足した時は、MFのグループ資金から借りることができる。ムラ同様、メンバーでなくても借りることができる。被調査者のMFの活動歴は、0～7年である。

④教育：本調査のインフォーマントは、未就学～8年生まで就学という教育状況であるが、全国共通の認定試験SLCを受験した者はいない。

⑤コミュニティ内のSCなど：コミュニティ内の信頼関係が強く、それぞれの家族状況や家計についても熟知している。助け合いや協調行動が強く、信頼やネットワーク（絆）の「結束型SC」が極めて強い。お祭りにもみんなで参加している。しかし、他のカーストから差別されており、「橋渡し型のSC」や「連結型のSC」が低い。Iは8年生まで学校に行っていたのでコミュニティ内で識字教室を開いていた（6カ月間）が、体調を崩したため、閉鎖した。Jは、雑貨屋を開店して、子どもの教育費をそこから捻出している。

3. コミュニティ開発の持続性とSCの課題

3.1 開発における「潜在能力」の拡大とSC

バディコミュニティのように経済的な「所得貧困」のみならず、差別や社会的排除といった人間の基本的な権利や、機会が保証されていない「人間貧困」に陥っているコミュニティでは、SCを基盤としたMF活動の参加型開発が有効である。

川村（2012：261）は貧困の原因として、しばしば共通してみられるのは、自分の「潜在的な力」を発揮する機会が奪われている状況があることだと指摘している。また、セン（2002：167-169）は「潜在能力」の機能の拡大こそが、発展の究極

表1 バディコミュニティ（ムラ）での家族・MF活動・SC等に関する聞き取り調査結果

	家族構成 ()は年齢：歳	職業（収入源） 1Rs = 約0.86円： 2014 / 2015	支出 MFの活動歴	教育	コミュニティ内のSC その他、特記事項
A	家族：7人 本人(50), 長男(32), 次男(22), 長女(21), 長男の子供2人(6, 5), 次男の子供(3) 3人の子供の父は、すべて異父	<ul style="list-style-type: none"> 本人：売春していたが、現在はタルカリ（野菜の惣菜）販売、100～250Rs/日、お酒1ビン売って10Rs。 長男、次男：インドへ出稼ぎ、それぞれ8,000Rs/月。(ネパールRsに換算) 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出：8,000Rs。 貯金はあまりしていない。 MFの活動歴：1年。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人：未就学。 長女：10年生まで。 	<ul style="list-style-type: none"> 信頼関係（SC）が強く、助け合い精神が定着。安心感が強い。 娘には売春の仕事を引き継がせず、結婚をさせたい。
B	家族：11人 本人(49), 夫(50), 長男(32), 次男(25), 三男(19), 長女(17), 3人の息子の嫁、順に(22, 18, 16), 長男の子供2人(6, 5)	<ul style="list-style-type: none"> 本人：売春していない、MF活動で養豚の仕事（子豚を2,000Rsで売買、または食肉として100Rs/kgで売買、1頭は50kg） 長男、次男：インドへ出稼ぎ、各8,000Rs/月、嫁はみな家事。 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出：20,000Rs（学費を含む）。 MFの活動歴：2年。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人：5年生まで。 19歳息子：12年生。 17歳娘：10年生、看護師の資格。 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティ内は、信頼が厚く、親しい関係であるが、コミュニティ外では差別されている。 日雇の仕事しかできないので、職業のための研修が必要。
C	家族：6人 本人(22), 父(40), 母(38), 兄(29), 兄嫁(22), 妹(17) 兄とは異母兄弟、妹(20)は結婚して婚出。	<ul style="list-style-type: none"> 本人：現在も売春を職業としている。(15,000～20,000Rs/月) 妹の教育費、生計維持のため。既婚の妹は売春をせず。 父：魚釣りして魚の販売300Rs/1kg。 兄は結婚してインドへ出稼ぎ、兄嫁はコミュニティ内に居住。 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出：30,000Rs（薬代を含む）。 MFの活動歴：1年。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人：4年生まで。 妹：現在10年生。 	<ul style="list-style-type: none"> 信頼関係があり、お互いの生活状況をよく理解している。 生活費が不足の時は、女性グループから借用。
D	家族：7人 本人(30), 父(50), 母(40), 弟2人(15, 10), 妹2人(25, 23) は、結婚して婚出。 息子(1.5, 双子)	<ul style="list-style-type: none"> 本人：売春していたが、9年前に他のカーストからの抗議でやめた。 父：インドへ出稼ぎ、8,000Rs/月。 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出：10,000Rs～30,000Rs（治療代、薬代含む）。 MFの活動歴：2年。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人：3年生まで。 弟：それぞれ9年生と4年生。 	<ul style="list-style-type: none"> 良好な人間関係の中で生活。
E	家族：6人 本人(25), 父(50), 母(45), 妹(17), 弟(9), 娘(5ヵ月)	<ul style="list-style-type: none"> 本人：現在も売春を職業としている。(約15,000Rs/月, 1人1回, 1,000～2,000Rs), 妹や弟の教育費、生計維持のため。 父母：他家の畑で仕事、報酬はお米。 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出：8,000Rs。 MFの活動歴：なし。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人：5年生まで。 妹：9年生。 弟：3年生。 	<ul style="list-style-type: none"> MFの活動グループには入ってなくても、生活費が不足した場合、グループから借りることができる。

表2 バディコミュニティ(ラジャプール)での家族・MF活動・SC等に関する聞き取り調査結果

	家族構成 ()は年齢:歳	職業(収入源) 1Rs=約0.86円: 2014/2015	支出 MFの活動歴	教育	コミュニティ内のSC その他, 特記事項
F	家族:7人 本人(35), 父(60), 母(50), 弟(25), 弟嫁(22), 長女(18), 次女(14)	<ul style="list-style-type: none"> 本人:母と同様, 売春していた。現在は, 日雇労働, 300Rs/日, 約3,500Rs/月。 弟嫁:日雇労働, 賃金。(ネパールRsに換算) 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出:8,000Rs。 MFの活動歴:なし。これから加入。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人:6年生まで。 長女:10年生まで。 	<ul style="list-style-type: none"> 信頼関係が強い。 コミュニティ内の人間関係熟知。 売春の仕事はない方がいい。
G	家族:5人 本人(40), 妹(27), 長男(20), 長男嫁(19), 長男の子供(10ヵ月)	<ul style="list-style-type: none"> 本人:売春していたが, 現在は日雇労働, 300Rs/日。 妹:同じく, 日雇労働, 300Rs/日。 長男はインドへ出稼ぎ, 8,000Rs/月。 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出:15,000Rs (治療費・薬代を含む)。 MFの活動歴:7年。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人:3年生まで。 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティ内の70家族は親密な関係。MFの活動にかかわらず, 信頼関係あり。 本人は高血圧症。
H	家族:7人 本人(42), 妹(39), 長女(20), 長男(16), 次男(14), 三男(6), 妹の長男(17) 4人の子供の父は, すべて異父。	<ul style="list-style-type: none"> 本人:売春していたが, 現在は日雇労働, 300Rs/日。 妹:売春していたが, 現在は日雇労働。 長女:日雇労働。 長男・妹の長男:インドへ出稼ぎ, 日雇労働, 400Rs/日。 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出:6,000Rs MFの活動歴:2年。生活費が不足の時は, 女性グループから借りる。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人:未就学。(制服, 靴, 学用品を購入できず) 妹:未就学。 	<ul style="list-style-type: none"> わからないことは, 教え, 助け合っている。 他のカーストとは, 付き合いがない。 長女には売春の仕事をさせたくない。 父母は, マーダル(ネパールの民族楽器, 太鼓)を作っていた。
I	家族:7人 本人(45), 長男(29), 次男(26), 三男(23), 四男(22), 長男の子ども2人(12, 11) 夫は, 結婚後3年で死亡。長女(24)は, 結婚して婚出。全員, 夫の子。 現在, 孫と3人暮らし	<ul style="list-style-type: none"> 本人:売春していない。 息子4人:インドへ出稼ぎ, 一人約8,000Rs/月。 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出:2,000Rs~5,000Rs。 MFの活動歴:4年。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人:8年生まで。 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティ内, 差別なく, 信頼関係がある。 父母が, 売春の仕事を禁止。 コミュニティ内で相談して, 識字教室を開いていた(6ヵ月間)。体調崩し, 中止。
J	家族:4人 本人(25), 夫(25), 長男(10), 長女(4) 本人の父母, 5歳の時に死亡。 結婚して13年。	<ul style="list-style-type: none"> 本人:売春をしていない。雑貨屋を8ヵ月前から開店。8,000Rs/月。学費に使用。 夫:インドへ出稼ぎ, 会社勤務22,000Rs/3ヵ月 	<ul style="list-style-type: none"> 1ヵ月の支出:15,000Rs~20,000Rs。子供の学費(2,500~3,000Rs) MFの活動歴:2年。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人:7年生まで。 長男:7年生。 長女:1年生。 	<ul style="list-style-type: none"> 親戚はいないが, コミュニティ内では, 差別なく暮らしている。 生活費が不足したときは, 女性グループから借りている。 幼少期は, 叔母が養育。

的目標かつ、自由の拡大を意味すると主張している。

エンパワーメント⁸⁾により引き出される「潜在的な力」は、内発的発展能力となり、自発的な開発への道を切り開く原動力となる。このことは、稲葉陽二（2007：4-5）が、SCを「心の外部性を伴った信頼・規範・ネットワーク」と定義し、「人々の心に働きかけてはじめて意味を持つもの」と述べていることや、Basargekar（2010）がSCの構築は、「自動的に表出してくるものではなく、心の働きかけを意識しながらMF活動を通して構築される」と指摘していることと一致する。

今回の聞き取り調査からも、MFの活動は、貸出と返済（『規範』）の経験・蓄積やそれにより体得される互恵性を通して、グループメンバー間に安定的な『信頼』感を醸成し、良好な『ネットワーク（絆）』を構築することから、コミュニティ開発における「潜在能力」の拡大とSCの役割の重要性が明らかになった。

3.2 持続可能なコミュニティ開発の課題

持続可能なコミュニティ開発には、住民間の『ネットワーク』を起動させるキーパーソンが存在が重要であり（稲葉 2011：107-108）、リーダーの資質が開発の鍵を握る。

2015年12月の聞き取り調査では、キーパーソンのリーダーシップ欠如により、ラジャプールにおけるMF活動は、顕著に停滞していた。キーパーソンであったリーダーの病気に加え、多額のグループ資金の持ち逃げ、震災後のろうそくの原料の高騰などにより、負のスパイラルに陥り、コミュニティの脆弱さが表出した形となった。課題解決のためのミーティングも行なわれず、メンバーの中には売春の仕事に復帰した人もいた。

SCの再構築をして、リーダーの養成と地域固有の所得向上のための課題発見と対応を協働で行い、コミュニティの再生・活性化を図ることが求められている。

また、持続可能なコミュニティ開発には、教育の充実を図ることも欠かせない。個々人の自立や内なる力を高め、意識改革やネットワークの拡大、コミュニティの範囲を越えて、公的機関から資源や情報を活用する能力（「連結型のSC」）を養成

することが肝要である。

3.3 バディコミュニティにおけるSCの課題

SCは常に価値が一定で、同じ方向に正に作用するわけではないとRose（1998）が主張するように、SCには負の側面（ダークサイド）があることが指摘されている。稲葉陽二（2011：167-168）は、SCの「ダークサイド」の一つとして、「しがらみ」を挙げ、特に「結束型のSC」と「しがらみ」は「表裏一体の場合が多い」と述べている。

筆者のMF活動のフィールド調査でも、閉塞的な倫理観や価値規範が残るコミュニティでは、チャウパディシステムや幼児婚の慣習を続けている。また、都市部から離れているインド国境に近い地域でも幼児婚、ダウリー、グムトゥなどの伝統的な陋習⁹⁾ともいえる慣習を、メンバー内での規範として踏襲し続けるという負のSC（個人の自由の制限と不寛容さ）がみられた（青木 2015：202-205）。

バディコミュニティでは、カースト制度による社会の階層化と差別的処遇が人びとの意識の中に共通して、深く刷り込まれており、それゆえコミュニティ内での助け合い精神、信頼関係、紐帯が強く、「結束型のSC」が格別が高い。

このような内部で同質なもの同士が強く結びついている状態を凝集性と呼ぶが、稲葉（2011：45）は、閉じたネットワークは凝集性が高いと指摘している。三浦（2015：141）はまた、結束が強すぎるSCによって内向きな指向を持ち、排他的な力が働くことはあるものの、地域社会の中で地縁的な結びつきや一定のSC役割を果たすことも確かであるとも述べている。

このような「結束型SC」による負のSCは、ムラのコミュニティでもみられ、コミュニティ外への依存体質という価値規範から抜け出せない状況も見られた。今後は、さまざまなネットワークを通じて、外向きで異質なもの同士が結びつく「橋渡し型のSC」や、異なる社会階層の個人や団体をつなぐ「連結型（linking）のSC」によって、新たな価値規範を構築し、制度化していくことが望まれる。

おわりに

ネパールにおけるコミュニティと社会構造の問題は、カースト制度による階層性やジェンダーに基づく差別や貧困の問題と深く関連しており、持続的なコミュニティ開発には、参加型のMF活動を通してSCの役割が大きいことが明らかになった。

バディコミュニティにおいて、MF活動は、収入源として売春の仕事からディーセントワークに移る力を与え、女性の地位向上につながっているといえる。こうした活動が、所得向上や生活面で生ずる不安定さの軽減をもたらし、さらには他カーストとの混合研修・活動から差別構造の解消にも寄与していることがわかった。細内（2010：45-46）が指摘する「コミュニティでの活動は、人間性の回復、経済的基盤の確立と雇用の創出に効果がある」ことが、ここでも実証された。

持続的なコミュニティ開発には、MFの活動における「橋渡し型」や「連結型」の横断的・縦断的連携のSCが特に重要である。具体的には、ネパール政府の村落開発委員会や郡行政事務所の行政担当者、国際NGOや現地NGOのカウンターパート¹⁰⁾などとの連携が、グループ活動には不可欠である。そのためには、交渉能力のあるキーパーソンが存在が必須であり、リーダーシップを発揮できる人材育成が喫緊の課題である。

また、カースト制度による社会の階層化と差別的処遇がバディコミュニティの人びとの意識の中に、深く刷り込まれているため、コミュニティ内での紐帯が強く、「結束型のSC」が格別に強い。このSCは前述のとおり、常に正に作用するわけではなく、SCの負の側面（ダークサイド）があることにも留意しなければならない。その意味からも外向きで異質なもの同士を結びつける「橋渡し型」や「連結型」のSCを強化することが求められる。

コミュニティにおいてSCが維持・醸成されれば、それによって形成された豊かな人間関係によるMFの活動が、積極的に推進されることになる。こうした活動から引き出される潜在能力の拡大は、生活改善、所得、人権意識の向上につながり、社会的排除や包摂の課題を解決し、次世代の育成に

繋がる新たな力を生み出し、開発への道を切り拓くものと考えられる。

注

- 1) 人間開発とは、「開発の基本的な目標は人々の選択肢を拡大することである」としている。国連開発計画（UNDP）の委託を受けて、『人間開発報告書（Human Development Report：HDR）』が、1990年から毎年刊行されている。http://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/library/human_development/human_development1/（2016.3.19閲覧）
- 2) ダリット（人口の約13%、2011年国勢調査）は、アウトカーストとして、政治、経済、教育、医療等の面で厳しい状況に置かれている。
- 3) 国民の81.3%がヒンドゥー教徒（外務省：ネパール基礎データ）であるネパールでは、カースト制度が1963年に憲法によって廃止されたものの、その世襲的な身分による階層制や慣習が現在も人々の生活文化の中に根強く息づいている。
- 4) 板橋区・大東文化大学地域デザインフォーラム「地域社会Ⅰ まちづくりとコミュニティ 第1章 コミュニティとコミュニティ活動」『分科会中間報告書』, p.3
http://www.daito.ac.jp/designforum/pdf/2001interim_b01_01.pdf（2016.3.19閲覧）
- 5) チャップパディシステム（chaupadi system）とは出産、月経の際の出血に対する恐れ、不浄観、穢れなどから、生理中の女性を日常生活から隔離する慣習である。
- 6) インドルピー（Rs）で5,000Rs／月であるが、ネパールルピー（Rs）の8,000Rs／月に相当する。
- 7) 外務省「諸外国・地域の学校情報 ネパール」国・地域の詳細情報（2015年11月更新）
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC10900.html（2016.3.22閲覧）
- 8) エンパワーメントとは、人間の潜在能力が発揮できるような平等で公平な社会の構築を目指そうとする概念（太田 2007：157）であり、

社会集団のひとりひとりが、その力をつけることである。

- 9) ヒンドゥー教の陋習といわれるチャウパディシステム(注5), タライ平野部などでは、ダウリー(dowry:結婚時の持参金)や幼児婚(child marriage), グムトウ(ベール)の義務づけなどの慣習の問題がある(青木2015:182-184)。
- 10) カウンターパートとは、国際協力の場において現地で受け入れを担当する機関や人物を指す。

参考文献

- 青木千賀子(2010)「ネパールのバディカースト(売春カースト)の実態と差別構造の解消への課題」『比較生活文化研究』Vol.16, 比較生活文化学会, pp.33-47。
- (2015)「博士論文 ネパールの女性グループによるマイクロファイナンスの活動とソーシャル・キャピタルに関する研究」日本大学(国際関係)。
- (2016)「社会開発におけるマイクロファイナンスの活動とソーシャル・キャピタルの有効性—ネパールのバディカースト(売春カースト)の事例分析から—」『比較生活文化研究』Vol.22, 比較生活文化学会, pp.7-18。
- 伊藤ゆき(2010)「“チャウパディ慣習根絶令”を巡るネパールの女性たち—月経慣習と法の間」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』第10号, pp.105-126。
- 稲葉陽二(2007)『ソーシャル・キャピタル—「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題』生産性出版。
- (2011)『ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ』中央公論新社。
- 太田美帆(2007)「ファシリテーターの役割」佐藤寛編『テキスト社会開発 貧困削減への新たな道筋』日本評論社。
- 岡本真理子他(1999)『マイクロファイナンス読本 途上国の貧困緩和と小規模金融』明石書店。
- 風見正三・山口浩平(2009)『コミュニティビジネス入門 地域市民の社会的事業』学芸出版社。
- 川村暁雄(2012)「マイクロファイナンス(マイクロクレジット)—貧困解決のためのイノベーション」神野直彦・牧里毎治編著『社会起業入門—社会を変えるという仕事』ミネルヴァ書房。
- 佐藤 寛(2001)「序章 社会関係資本概念の有用性と限界」佐藤 寛編『援助と社会関係資本—ソーシャル・キャピタル論の可能性』アジア経済研究所。
- 角 一典(2008)「コミュニティを形作るものは何か?—1970~80年代の日本の社会学におけるコミュニティ論を手がかりに」『2007旭川オープンカレッジ連続講座「あさひかわ学」報告集』。
- セン, アマルティア(Sen, Amartya), 大石りら訳(2002)『貧困の克服—アジア発展の鍵は何か—』集英社新書。
- 坪郷 實(2015)「ソーシャル・キャピタルの意義と射程」坪郷 實編著『ソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房。
- 内閣府国民生活局編(2003)『ソーシャル・キャピタル:豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』。
- 内閣府経済社会総合研究所編(2005)『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書(研究会報告書等 No.15)』。
- パトナム, ロバート(2001/原著1993)河田潤一訳『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』, NTT出版。
- (2006/原著2000), 柴内康文訳『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生』, 柏書房。
- 細内信孝(2010)『コミュニティ・ビジネス』学芸出版社。
- 三浦一浩(2015)「地域自治, 市民活動とソーシャル・キャピタル—くびきの事例から—」坪郷 實編著『ソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房。
- 三隅一人(2015)「《研究動向》テーマ別研究動向

- (ソーシャルキャピタル)』『社会学評論』Vol.66, No.1, 日本社会学会, 有斐閣, pp.134-144。
- Basargekar, Prema (2010) “Measuring Effectiveness of Social Capital in Microfinance: A Case Study of Urban Microfinance Programme in India”, *International Journal of Social Inquiry*, Vol.3, No.2.
- Bhadel, Pushpa (2008) ‘Role of Social Mobilization in Social Upliftment of the Badi Community in Far Western Nepal’, Pradhan, Pushkar K. *Public Policy and Local Development—opportunities and constraints—*, pp.85-98.
- Kisan, Yam Bahadur (2008) “A Study of Dalits’ Inclusion in Nepali State Governance”, *Social Inclusion Research Fund (SIRF)/ SNV-Nepal*, pp.1-110.
- Rose, Richard (1998) “Getting Things Done in an Anti-Modern Society: Social Capital Network in Russia” *Social Capital Initiative Working Paper No.6*, The World Bank.